



えびな まこと
海老名 誠教授

ビジネス創造センター(CBC)副センター長

- 1968年 3月 小樽商科大学商学部経済学科卒業
- 4月 ㈱富士銀行入行
- 1972年10月 ㈱富士銀行NY支店
- 1976年 5月 ㈱富士銀行信託会社(米国)調査役
- 1987年 4月 ㈱富士銀行香港支店副支店長
- 1991年 8月 ㈱富士銀行目黒支店長
- 1993年 5月 ㈱富士総合研究所国際調査部長
- 2000年 6月 ㈱富士総合研究所理事
- 2002年10月 みずほ総合研究所(㈱)理事
- 2004年10月 小樽商科大学ビジネス創造センター教授

まずは、先生が本学に在学しておられた頃のお話をお伺いしたいのですが？

海老名：私の学生時代は昭和39年4月～43年3月で、加茂学長～実方学長の両学長時代。ゼミ教官は麻田四郎先生(国際経済)でした。小樽商大に入学し、やはり「実学重視の大学」であることを実感しました。また、大学の(対学生への)雰囲気は「一人前の大人」として対応してくれたこと、その一方でその責任感を教えられたことが今も残っています。そして実社会と近い国際的な学生を育てる大学としての印象が強かったと思います。入学した1ヵ月後に、当時の英語教師であったウォレス・スミス先生(米国人)から

民間での経験を生かした 社会貢献を

行員期間の約半分が海外生活

「北海道英語弁論大会」への参加を薦められ、出場してみたら優勝してしまったんです。これを機に本格的に語学勉強を始めたと言えると思います。この翌年(2年次)には小樽商大ESS(現在のESA)の部長を、そして3年次にはこの部の北海道の委員長を務め、同年の夏にケルン(ドイツ)での3ヵ月半の留学(現在の短期語学研修)の機会に恵まれました。その際には、なんと実方学長ご自身が札幌駅まで見送りに来て下さったんです。今では到底考えられないことです。

本学を卒業され、本学へご着任されるまでの生活をお話願いたいのですが？

海老名：商大を卒業後に富士銀行に入行、札幌支店に2年半勤務しました。その後NY支店で7年間、帰国後に東京で3年間、そして香港に7年間勤務しました。帰国後に目黒支店へ、その後1993年から昨年までの約12年間は同行の総合研究所国際調査部長、理事、みずほ総合研究所理事などを歴任してまいりました。この間においても頻りに各国に出向くことが多く、振り返ってみますと、行員としての約半分の期間は海外で生活していたことになりま

随分と長期にわたる海外経験でのエピソードなどをお聞かせ願えませんか？

海老名：私の場合は、1976年7月4日の「米国建国200年祭」を祝うNYのハドソン川での記念事業が強烈な思い出の一つです。世界各国から80隻にも及ぶ帆船(日本丸も)が集結し、それはもう感激したものです。あの時ほど「世界に国境はない」と感じたことは

ありません。さらには、2001年9月11日に起こった同時多発テロによる「ワールド・トレード・センター」事件で、大切な18名の仲間を失ってしまったことです。これは実に悲しい出来事でした。今ひとつは、香港が中国に返還(1997年7月1日)された翌日に起こった「アジア通貨危機」問題です。アジア各国が必死にこの危機から回復する姿を見て、「日本人はもっと世界の事象に目を向けるべきだなア」とつくづく感じました。身の事ばかりに気が向けられ、国際観に疎い日本人の表れなのかも知れませんね。

最後に、縁あって本学へ赴任された先生が、日頃感じておられる点は？

海老名：これまで2度ほど小樽商大の「エバーグリーン講座」で講義を担当(1997年、2001年)させていただきましたが、女子学生が多くなったことに驚きました。北海道に住むのは34年ぶりです。本学に赴任するまでは、ほとんど毎月「経済連携協定(FTA)」業務のため、主としてフィリピンに出向いておりました。同国の看護師は、日本で働きたいという強い希望を持っており、その希望を叶える“橋渡し”的な仕事も手掛けてきました。そのようなことで、もしも小樽商大に赴任していなければ、フィリピンで生活を送っていたかも知れません。「商大観・商大生観」に関しては、例えばBIC(ビジネス・アイデア・コンテスト)を審査した感じでは、学生が「全体的に小粒なのでは」と感じましたので、もっと“夢を語れ”と言いたいですね。そんなところが率直な感想です。そして、私としては「我が小樽商大において、民間での経験を生かした貢献ができるよう精一杯努力していきたい」と考えております。